

望ましくない特性の変容可能性についての信念の発達
—幼児期の素朴楽天主義から児童期の努力依存の楽天主義への移行—

Japanese Children's Beliefs about the Stability of Negative Traits: From Young
Children's Naïve Optimism to Effort-Dependent Optimism

中 島 伸 子¹・田 中 優 理²

Nobuko Nakashima and Yuri Tanaka

Abstract

Previous studies have shown that young children are overall more optimistic than older children and adults in that they believe negative physical and psychological traits can change in an extremely positive direction through maturity or increased age. We call this type of optimism "naïve optimism". In a series of two studies of 74 Japanese participants from four age groups (preschool, grades 1, 2, and 3) in Study 1 and 24 Japanese young children from two age groups (4-year-olds and 5-year-olds) in Study 2, it was showed that young children's optimism differed from that of older children and adults, which was called "effort-dependent optimism" and the belief that negative traits could be improved in a somewhat better direction through personal effort or practice.

Key words: children's optimism, beliefs about the stability of traits, naïve optimism, effort-dependent optimism

問題と目的

近年の認知発達研究では、幼児は人間のもつさまざまな心理特性および身体特性について、「望ましくない特性は将来にわたって望ましい方向に変容する」という楽天的信念をもつことが繰り返し報告されてきた (Lockhart, Chang, & Story, 2002; Lockhart, Nakashima, Inagaki, & Keil, 2008; 中島・稲垣, 2007)。Lockhart, et al.(2002)は、こうした信念を幼児の楽天主義 (young children's optimism) と呼び、種々の技能獲得の過程で遭遇する失敗によるダメージから彼らを守り、長期間にわたる学びを可能にする、自己防衛的機能を有すると主張している。本研究では、これらの知見を踏まえ、幼児の楽天主義の特徴とその後の発達の変化についてより詳しく検討をすすめる。

Lockhart, et al.(2002)は、米国の5～6歳児、7～10歳児、大学生を対象とした一連の実験で、幼児の楽天主義の存在が確かめられたと結論づけている。そこでは、5歳のときも10歳のときも持っていた望ましくない特性 (例えば「クラスの友達の誰よりも意地悪」など)を変えたいと思いつけたら、大人 (21歳)になっ

2017.6.12 受理

¹ 新潟大学教育学部

² 無所属 (2014年度新潟大学教育学部学習社会ネットワーク課程卒業)

た時にはどうなるかを3選択肢のもとで答えさせた。その結果、幼児は小学生や大学生と比較して、望ましくない特性の改善度合いを高く見積もることが示された。一方、望ましい特性（例えば「クラスで一番優しい」など）に対してはそのまま維持され続けるという信念を持つ者がほとんどであり、この点については年齢差はほとんど見られなかった。

この幼児の楽天主義は米国だけでなく、欧米に比して自己高揚傾向が低く（北山, 1998）、自己および他者についての信念が大きく異なるとされる日本文化（Heine, 2001；Markus & Kitayama, 1991）のもとでも同様にみられることが報告されている（Lockhart, et al., 2008；中島・稲垣, 2007）。Lockhart, et al. (2008) は、Lockhart, et al. (2002) で使用した課題の一部を日米の5-6歳児、8-10歳児、大学生に対して実施し、結果を比較分析することでこのことを検討している。日米共に、幼児は児童や大学生と比較して、望ましくない特性の改善度合いを高く見積もることが示された。なお、改善度合いの見積もりについて、幼児期も児童期も日米差は確認されなかった。さらに特性改善の理由付けの詳しい分析から、幼児では「加齢・成熟（大きくなったから）」を挙げることがもっとも多く（日本60%、米国50%）、小学生では「努力や練習」を挙げることが多い（日本32%、米国28%）ことが示された（ただし、いずれの場合も「わからない」「無反応」「意味不明」以外の理由づけは除外したのちの割合であった）。

一方、小学生から大学生にかけての発達的变化には、大きな日米差がみられた。特性改善度合いの見積もりについて、日本の大学生は小学生と相違がなかったのに対して、米国の大学生は小学生よりも低く見積もることが示された。なお日本の大学生は米国の大学生と比較して改善度合いを高く見積もることが示された。また、改善可能だと考える理由にも大きな日米差があり、日本の大学生は「努力・練習」を挙げる場合が最多（33%）であったのに対し、米国では17%（「加齢・成熟」27%、「その他」26%に次ぐ）に過ぎなかった。

以上の結果から、幼児期の楽天主義は、「年月の経過とともに望ましくない特性はとても望ましい特性へと（自然に）変わるだろうという信念」を含んだものであり、それは文化による影響を受けにくいことが強く示唆される。中島・稲垣(2007)は、こうした特徴を持つ幼児期の楽天主義を「素朴楽天主義」と呼んでいる。一方、小学生においても楽天主義は存在するが、幼児の素朴楽天主義とは異なり、努力や練習さえすれば望ましい特性へと少しは変化させられるという信念—これを中島・稲垣(2007)は「努力依存の楽天主義」と呼んでいる—であることが示された。この努力依存の楽天主義は大学生において日米で大きな相違がみられたことから、文化の影響を受けやすいことが強く示唆される。

児童期以降の努力依存の楽天主義も失敗・困難時の防御的機能を果たすものと推測される。たとえ失敗しても、努力をすれば改善可能だという見通しがもてれば、具体的アクションをおこすことの動機づけにもつながるだろう（中島, 2012）との指摘もある。現実認識も進み、ある時間内に一定内容の習得が求められることの増える児童期以降においては、素朴楽天主義よりもこちらの方がより適応的だともいえる。

しかしながら、努力依存の楽天主義は幼児期にはみられないと結論づけることは早計である。その理由としてここでは、これまでの研究で使用されてきた課題の特徴に注目したい。これまで使用されてきた課題では、望ましくない特性を持つ人物が登場する物語を提示し、将来的にその特性がどうなるかの推論をもとめてきた。その際、物語中の登場人物は望ましくない特性を改善したいという願望を持続的に有することが示された。このような物語を提示された幼児たちの多くは、登場人物は特性改善願望があるので、改善に向けて何らかの特別な活動なり努力をすると自発的に推測した可能性がある。つまり、努力を特性改善の原因と考えた上で反応を示したにもかかわらず、言語能力の未熟性などの理由から言語化できなかった可能性がある。

これらを踏まえると、努力依存の楽天主義は幼児期にはみられないと結論づけるためには、幼児の言語反応に大きく依存しない別の方法を用いる必要がある。本研究では、これまで使用されてきた物語—登場人物が望ましくない特性の改善を望んでいる—の他に、新しい物語—登場人物が特性改善を望んでおらず（そのままの状態でよいと考えており）、特性改善に向けての努力をしていない—を作成し、各物語提示後に登場人物の特性変容について推論させる。このように努力の有無という点で異なるタイプの人物が登場する2種の物語を作成し、その人物の特性変容についての推論を比較検討する。もし幼児が特性改善の原因として努力や練習を想定しないのであれば、登場人物の努力の有無に関わらず特性は同程度に望ましい方向へ変容すると考えるはずである。この場合、両人物に対する推論に相違はみられないと予測される。

本研究の第1の目的は、幼児は望ましくない特性の改善原因として努力や練習を想定することはほとんどない—つまり努力依存の楽天主義の段階ではない—との仮説を検証することである。そのために、望ましくない特性に対する改善願望・努力の有無という点で異なるタイプの人物を示し、各人物の特性変容についての幼児の推論を比較検討する。特性の改善願望・努力を示す人物に対して、そうでない人物に対するよりも特性改善の程度を高く見積もる傾向が示される場合、努力依存の楽天主義を持つと本研究では操作的に定義する。本研究の第2の目的は、努力依存の楽天主義への移行はいつごろ開始するかを特定することである。幼児から小3まで1学年刻みの4学年を設定し、移行がいつからみられるかを確定する。これまでの知見に基づくと、少なくとも小3児童は努力依存の楽天主義を示すと考えられる。

研究 1

1 方法

(1) 対象者

幼児・21名（女子9名、男子12名、平均年齢5歳4ヶ月、年齢範囲4歳4ヶ月～6歳3ヶ月）、小1・16名（女子8名、男子8名、平均年齢6歳9ヶ月、年齢範囲6歳4ヶ月～7歳4ヶ月）、小2・17名（女子10名、男子7名、平均年齢7歳10ヶ月、年齢範囲7歳5ヶ月～8歳3ヶ月）、小3・17名（女子8名、男子9名、平均年齢8歳9ヶ月、年齢範囲8歳4ヶ月～9歳4ヶ月）。なお、幼児男児2名と小1男児1名は、一部の課題に対して無反応、わからないとの反応を示したため、上記の対象者数から除外してある。幼児はN市内の保育所に通園している子どもたち、小学生はN市内の小学校に通学している子どもたちであった。

(2) 刺激材料と課題

望ましくない特性の将来にわたる変容可能性を推論させる8課題を作成。8課題中4つは先行研究で使用されたものと同形式の標準課題、残り4つは新形式の努力無し課題であった。標準課題においては、5歳と10歳のときに望ましくない特性を持つ人物が登場し、改善願望を有するという物語を示す。その後、登場人物の21歳時における特性の変容状態を以下の3選択肢から1つ選ばせ、その理由を尋ねた：①5歳、10歳のときと同じ望ましくない特性のまま、②中程度に望ましい特性へと変化、③とても望ましい特性へと変化、の3つである。努力無し課題においては、物語中の登場人物は望ましくない特性を現状のままで良いと思っている点、21歳になるまでの間、改善努力を実施しなかった点のみが、標準課題とは異なった。使用した特性は2つの身体特性（身長が低い、走るのが遅い）と2つの心理特性（意地悪、覚えるのが苦手）、計4つであり、標準課題、努力無し課題においてそれぞれ使用した。これらの特性は、先行研究において大学生が望ましくないと判断したものであり（Lockhart, et al., 2002）、先行研究で使用されてきたものである（Lockhart, et al., 2002; Lockhart, et al., 2008, 中島・稲垣, 2009）。男性対象者用には男児が登場する物語を、女性対象者用には女児が登場する物語を使用した。課題例をTable1-1に、課題で使用した4特性項目と物語の概要をTable1-2に示す。各物語において、登場人物の5歳時、10歳時の様子を読み上げる際に、また各課題での3選択肢を読み上げる際に、それぞれの様子を表す絵刺激を提示した。

(3) 手続き

個別面接により実験を行った。対象者の半数に対しては標準課題→努力無し課題の順序で実施し、残り半数の対象者に対しては逆の順番で課題を実施した。4つの特性の提示順序、選択肢の提示順序は対象者ごとにランダムであった。

Table1-1 研究1:課題例・意地悪

イチコさんは保育園の5歳の時、クラスの中で一番の意地悪でした。お友達に意地悪なことを言ったり、苛めたり、嫌なことをいうことがとてもよくありました。イチコさんは、とても優しくなりたいと思っていました。(意地悪のままでもいいやと思っていました。)

イチコさんは10歳になりました。10歳の時も、クラスの中で一番意地悪な子どもでした。イチコさんは、とても優しくなりたいと思っていました。(意地悪のままでもいいやと思っていました。)

イチコさんがもっと年をとって21歳の大人になった時、どうなっていると思いますか？(イチコさんは、ずっと意地悪のままでもいいと思っていましたので優しくなれるように一生懸命がんばったことはありません。)次の中から一番近いと思うものを選んでください。

- ① イチコさんは、とても意地悪で、他の人よりも意地悪です。他の人を苛めたり、嫌なことをよく言います。
- ② イチコさんは、少し優しくなり、他の人と同じくらいに優しくなりました。他の人を苛めたり、嫌なことを言うことはほとんどありません。
- ③ イチコさんは、とても優しくなり、他の人よりもとても優しくなりました。他の人を苛めたり嫌なことをいうことは全然ありません。

注：下線部は標準課題においてのみ、()内は努力無し課題においてのみ用いる表現。

Table1-2 研究1:課題で使用した特性と物語の概要

特性項目	物語の内容
身長が低い	タエコさんは5歳の時も10歳の時も、同じ年のお友達と背比べをしてみると、背が一番低くて、タエコさんより背が低い女の子はいませんでした。タエコさんは、お友達よりも背が高くなりたいと思っていました。(お友達よりも背が低いままでもいいやと思っていました。)
走るのが遅い	サトコさんは5歳の時も10歳の時も、同じ年のお友達と比べると走るのがとてもおそく、運動会ではかけこでいつもビリでした。サトコさんは、お友達よりも走るのが速くなりたいと思っていました。(お友達よりも走るのが遅いままでもいいやと思っていました。)
意地悪	イチコさんは5歳の時10歳の時も、クラスの中で一番の意地悪でした。お友達に意地悪なことを言ったり、苛めたり、嫌なことをいうことがとてもよくありました。イチコさんは、とても優しくなりたいと思っていました。(意地悪なままでもいいやと思っていました。)
覚えるのが苦手	アキコさんは5歳の時も10歳の時も、いろいろなことを覚えるのがとても苦手で、お友達よりも覚えることが下手でした。アキコさんは、お友達よりも覚えるのが上手になりたいと思っていました。(お友達よりも覚えるのが下手なままでもいいやと思っていました。)

注：下線部は標準課題においてのみ、()内は努力無し課題においてのみ用いる表現。

2 結果と考察

(1) 標準課題, 努力無し課題の特性改善得点

標準課題, 努力無し課題において「とても望ましい特性への変化」を選択した場合を3点, 「中程度に望ましい特性への変化」を選択した場合を2点, 「望ましくない特性のまま」を選択した場合を1点として, 「特性改善得点」を算出した。Table1-3およびFigure1-1に各課題の特性改善得点の平均と標準偏差を示した。特性改善得点を従属変数として, 年齢と課題順序を被験者間要因, 課題タイプを被験者内要因として, 学年(4: 幼児, 小1, 小2, 小3) × 課題順序(2: 標準課題が先, 努力無し課題が先) × 課題タイプ(2: 標準課題, 努力課題)の3要因の反復測定分散分析を行った。その結果, 学年の主効果($F(3,63) = 6.75, p < .01$), 課題タイプ的主効果($F(1,63) = 53.89, p < .01$), 学年 × 課題タイプの交互作用($F(3,63) = 7.28, p <$

.01), 課題タイプ×課題順序の交互作用 ($F(1,63) = 7.45, p < .01$) が有意であった。学年の主効果の低位分析の結果(Scheffe法による), 幼児は小2 ($p < .05$), 小3($p < .01$) より得点が有意に高いことが示された。また, 標準課題は努力無し課題よりも得点が有意に高いことが示された。

学年×課題タイプの交互作用が有意であったので, 学年ごとに課題タイプの単純主効果を分析したところ, 幼児以外の各学年においては有意であり(小1: $F(1,63)=8.76, p < .01$, 小2: $F(1,63)=22.6, p < .01$, 小3: $F(1,63)=36.9, p < .01$), 標準課題の方が努力無し課題よりも得点が高いことが示された。課題タイプ×課題順序の交互作用が有意であったので, 課題順序ごとに課題タイプの単純主効果を分析したところ, 標準課題を先にやる場合 ($F(1,63)=10.46, p < .01$), 努力無し課題を先にやる場合 ($F(1,63)=42.62, p < .01$) の両方において有意であり, 標準課題が努力無し課題より有意に得点が高いことが示された。課題タイプごとに課題順序の単純主効果を分析したところ, 両課題タイプにおいて有意な効果はみられなかった。

以上の結果は, 幼児は小2, 小3と比較すると, 望ましくない特性は時間の経過とともに改善すると予測する傾向が強いことを示すものであり, 先行研究の結果とも一致している(Lockhart, et al., 2002; Lockhart, et al., 2009; 中島・稲垣, 2007)。さらに, 幼児においては, 登場人物の改善願望や努力の有無に関わらず望ましくない特性は改善すると考える傾向が強いことが示された。一方, 小1以上の対象者は, 登場人物の改善願望や努力の有無に推論が強く左右され, 改善願望や努力がないことを強調すると, 特性の改善度合いを低く見積もる傾向を有することが確認された。

Table1-3 研究1: 特性改善得点平均値と標準偏差

	幼児		小1		小2		小3	
	標準	努力無し	標準	努力無し	標準	努力無し	標準	努力無し
順序1	2.44(0.44)	2.44(0.61)	2.28(0.47)	1.88(0.45)	2.08(0.17)	1.75(0.60)	1.94(0.52)	1.47(0.48)
順序2	2.40(0.70)	2.31(0.65)	2.13(0.56)	1.72(0.54)	2.38(0.54)	1.41(0.48)	2.34(0.43)	1.16(0.21)
集計	2.42(0.60)	2.37(0.63)	2.20(0.52)	1.80(0.50)	2.22(0.42)	1.59(0.57)	2.13(0.52)	1.32(0.41)

注1: 順序1は標準課題を先に実施した条件, 順序2は努力無し課題を先に実施した条件

注2: 得点範囲: 1(望ましくない特性のまま)~3(非常に望ましい状態に変化)

注3: カッコ内は標準偏差

(2) 標準課題, 努力無し課題における各選択肢の選択率

全4特性のうち, 標準課題の方が努力無し課題よりも特性改善得点が高い場合が4特性中3つ以上の対象者をS>N (SはStandard, NはNon-effortの略), 標準課題と努力無し課題の特性改善得点が高い場合が4特性中3つ以上の対象者をS=N, 努力無し課題の方が標準課題よりも特性改善得点が高い場合が4特性中3つ以上の対象者をS<N, その他の反応パターンだった対象者をOthersに分類した。Table1-4はこの方針に沿って対象者を分類し, 頻度を示したものである。学年と反応パタンの連関を検討するためにフィッシャーの直接確率検定を行ったところ1%水準で有意であった($p=.0057$)。調整済み残差の分析を行ったところ, 幼児ではS>Nが有意に少なく ($p < .01$), S=Nが有意に多い ($P < .01$) こと, 小2はS>Nが有意に多く ($p < .05$), 小3ではS=Sが有意に少ない ($p < .05$) ことが示された。

反応パタンの分析から, 幼児は登場人物の努力の有無に関

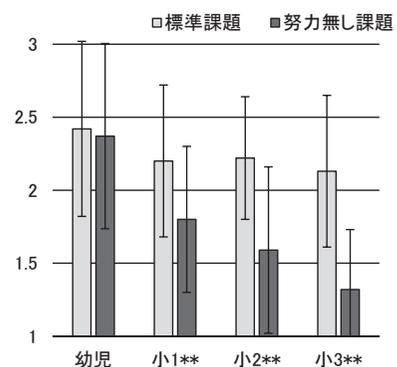


Figure1-1 研究1: 特性改善得点平均値

注1: 得点範囲: 1(望ましくない特性のまま)~3(非常に望ましい状態に変化)

注2: 課題タイプの単純主効果についての検定結果

** $p < .01$

注3: エラーバーは標準偏差

わらず反応を変えない者が多く、他の年齢群ではそうした子どもは少数派であることが示された。

(3) 標準課題, 努力無し課題における理由づけ

各課題において「特性が改善する」と答えた場合の理由づけを8カテゴリに分類した。Table1-5には各カテゴリの定義と回答例を、Figure1-2および1-3には反応割合と頻度を課題タイプ別、年齢群別に示した。対象者が回答の中で複数のカテゴリに入る説明を述べた場合は1個の反応とみなし、各カテゴリに配分した。2名の判定者が独立に評定を行った結果、判定の一致率は91.0%であり、評定が不一致であった回答については2名の判定者の協議により決定した。

標準課題において、各カテゴリの反応割合と年齢の間に連関があるかどうかを検討するために、各カテゴリの理由づけごとにフィッシャーの直接確率検定を行った。なお全8回の検定を実施したので、ライアン法に基づき、有意水準を $p=.0062$ に設定した。「努力・練習」($p=.00037$)、「願望・意欲」($p=2.487e-05$)、「反応の繰り返し・わからない・説明なし・意味不明な説明」($p=1.536e-12$)において有意な連関がみられた。残差分析の結果、「努力・練習」の反応割合は幼児が有意に少なく($p<.01$)、小2が有意に多い($p<.05$)ことが示された。「願望・意欲」の反応割合は幼児が有意に少なく($p<.01$)、小2($p<.05$)、小3($p<.01$)が有意に多いことが示された。一方、「反応の繰り返し・わからない・説明なし・意味不明な説明」の反応割合は幼児が有意に多く($p<.01$)、小2($p<.01$)、小3($p<.01$)は有意に少なかった。「努力・練習」は幼児ではほとんど見られず小学生では多いこと、幼児では「反応の繰り返し・わからない・説明なし・意味不明な説明」が多いことはこれまでの研究と一致している。

標準課題と努力無し課題における反応カテゴリの割合について統計的手法を用いて直接比較検討することはできないが、グラフから小1から小3においては、努力無し課題は標準課題と比較すると「努力・練習」「願望・意欲」の割合が少なく、「反応の繰り返し・わからない・説明なし・意味不明な説明」「その他」の割合が多い傾向にあることが読み取られる。このことから、小学生は物語の登場人物の努力や願望の有無の相違を読み取り、特性改善への見積もりの程度の相違として反映させた場合が多いことが推測される。

一方、幼児においてはその割合に大きな相違はみられないことから、彼らが物語の登場人物の努力や願望の有無の相違を的確に読み取っていたかどうか不明である。研究1では、幼児は登場人物の努力の有無に関わらず高い楽天主義傾向を示したが、もしかすると、単に登場人物の努力や願望の有無を的確に読み取れなかったため、両課題の相違がみられなかったに過ぎないのかもしれない。幼児期は努力依存の楽天主義ではないことを主張するためには、この可能性を排除しなければならない。つまり、登場人物の努力の有無を的確に理解させた上で、両課題における特性改善得点に相違がないことを確認しなければならない。研究2ではこの点を検討する。

Table1-4 研究1:各反応パターンを示した対象者数と割合

	幼児	小1	小2	小3
S>N	1(4.76)	5(31.25)	9(52.94)	8(47.06)
S<N	0(0.0)	0(0.0)	1(5.88)	0(0.0)
S=N	12(57.14)	6(37.5)	3(17.65)	2(11.76)
Others	8(38.10)	5(31.25)	4(23.53)	7(41.18)
N	21	16	17	17

注1:①S>Nとは、標準課題の方が努力無し課題よりも特性改善得点が高い場合が4特性中3つ以上、②S<Nとは、努力無し課題の方が標準課題よりも特性改善得点が高い場合が4特性中3つ以上、③S=Nとは標準課題と努力無し課題の特性改善得点と同じ場合が4特性中3つ以上、④Othersとは、①～③以外、の反応パターンである。

注2:カッコ内は割合

Table1-5 研究1:特性改善の理由づけカテゴリの定義と例

理由づけタイプ	定義	例
加齢・成熟	加齢や成熟に伴う自然な変化によって改善すると説明したもの。	「大きくなったから」「年をとったから」「大人(おじいさん・おばあさん)になったから」
生物・身体	生物学的あるいは身体的な変化や特徴によって改善すると説明したもの。日常的な身体的習慣もここに入る。	「成長期にぐんと身長が伸びた可能性があるから、他人よりも背が高いと思う」「足が長くなったので、他人よりも背が高くなった」「ご飯を食べたので」
努力・練習	何かについて努力する、練習する、勉強することによって改善すると説明したもの。運動やトレーニングもここに入る。	「努力をしてうまく覚えるためのコツを身につけたので、他人よりもたくさんものを覚えることができるようになった。」「速く走れるように練習したので、他人よりも足が速くなった」
願望・意欲	こうなりたい、こうしたいという願望や意欲によって改善すると説明したもの	「常に優しい人になりたいと思っていたことで、少しずつ意地悪な気持ちが変化して優しくなった」
習得	他者から教えられて習得する、あるいは経験の増加により身につけることによって改善の説明をしたもの	「先生がどうしたらうまく覚えられるかを教えてくれたから他人よりもたくさん覚えられるようになった」「今までの人生の中でいろいろな経験をして、他人を思いやれるようになり、優しくなった」
特性の時間的連続性/過去の状態	子どものときの特性はそのまま変わるものではないことを理由に、あるいは子どものときの特性の状態を理由として、少ししか変化しないことを述べたもの。	「小さい頃から足が遅いから、大人になっても少ししか速くならない。」
反応の繰り返し/わからない/説明なし/意味不明な説明	単に自分の選択した答えの内容を繰り返し述べているだけで、選択の理由を説明していない場合、分からないと答えた場合、何も答えなかった場合。意味不明な説明の場合	
その他	上記以外の反応	

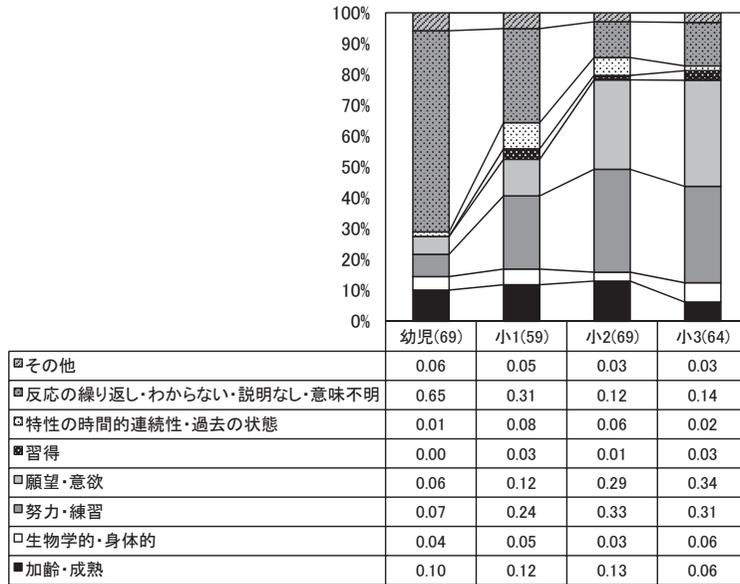


Figure1-2 研究1:標準課題における特性改善の各理由づけ割合

注:カッコ内は反応頻度

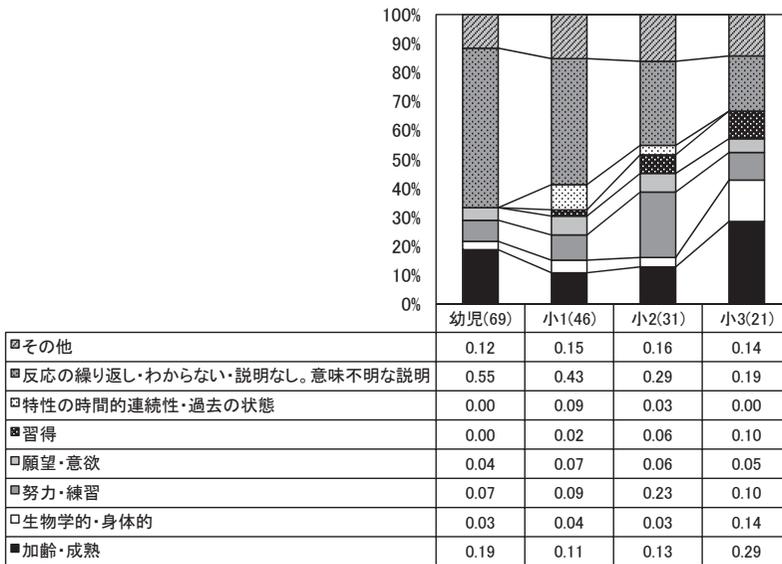


Figure1-3 研究1:努力無し課題における特性改善の各理由づけ割合

注:カッコ内は反応頻度

研究2

研究1から、幼児は登場人物の努力の有無に関係なく、望ましくない特性は望ましい方向に変化するという信念を持つ可能性が高いことが示された。しかしながら、この結論づけは時期早尚かもしれない。研究1では、物語の登場人物についての対象者の理解－登場人物が特性改善の願望を持つかどうか、努力をしたかどうかについての理解－を確認、徹底していなかった。幼児グループにおいてのみ、努力無し課題と標準課題に対する反応に相違が無かったのは、そもそも幼児が登場人物間の重要な相違を認識していなかったからという可能性が残される。そこで研究2では、登場人物間の相違を際立たせるための課題の修正、登場人物についての幼児の理解の確認、この2点を研究1の方法に加えて実験を実施する。それでもなお研究1と同様の結論が得られるかどうかを検討する。

さらに、研究1では、小1から努力依存の楽天主義に移行することが示されたが、この結論も時期早尚かもしれない。研究1では4歳児クラスと5歳児クラスに所属する幼児を区別せずに幼児という1学年グループにまとめて分析を行い、努力依存の楽天主義への移行は幼児からではなく小1からみられることを示した。一般に、5歳台後半は認知能力の大きな転換を迎える時期であるとの指摘がなされていることを踏まえると(e.g., 内田, 2008), 5歳児クラスの幼児において既に努力依存の楽天主義への移行がみられる可能性もぬぐえない。そこで研究2では、十分な人数の4歳児クラス、5歳児クラスの幼児を比較分析することで、幼児後期において努力依存の楽天主義への移行がみられるかどうかをあわせて検討する。

1 方法

(1) 対象者

4歳児クラス幼児・12名(男女半数ずつ, 平均年齢5歳4ヶ月, 年齢範囲5歳0ヶ月～5歳7ヶ月), 5歳児クラス幼児・12名(男女半数ずつ, 平均年齢6歳4ヶ月, 年齢範囲6歳1ヶ月～6歳7ヶ月)。幼児はN市内の保育所に通園している子どもたちであった。

(2) 刺激材料, 課題, 手続き

物語中の登場人物の有する望ましくない特性について、それに対する登場人物の改善努力の有無の違いを際立たせるために、研究1で使用した標準課題中の物語に変更を加え、努力あり課題と名称変更した。具体

Table2-1 研究2: 課題例・意地悪

〇〇さんと同じくらいの年の、ハナコさんという子がいました。ハナコさんはクラスの中で一番の意地悪で、お友達に意地悪なことを言ったり、いじめたり、嫌なことを言うことがとてもよくありました。ハナコさんは優しくなりたいたいと思ってがんばりました(意地悪なままでいいやと思って何もがんばりませんでした)。

そして、ハナコさんは10歳のお姉さんになりました。10歳のお姉さんになっても、まわりのお友達に比べて意地悪なままでした。ハナコさんは意地悪なのを直したいと思って、毎日毎日ずっと一生懸命がんばりました(優しくなれるように一生懸命がんばったことはありません)。

<努力の有無を問う質問> ここでハナコさんについて質問します。ハナコさんは意地悪なのを直したいと思ってがんばっているかな? それとも、そのままでもいいやと思って全然がんばっていないかな? どっちだと思う? ※選択肢提示順序はランダム

- ・正答の場合: 次に進む
- ・誤答の場合: 再度説明後、次に進む

では、ハナコさんが大人になったときに、どうなっていると思いますか? 次の中から一番近いと思うものを選んでください。

- ① ハナコさんはとても意地悪で、まわりのお友達よりも意地悪です。お友達をいじめたり、嫌なことをよく言います。
- ② ハナコさんは少し優しくなり、まわりのお友達と同じくらいに優しくなりました。お友達をいじめたり、嫌なことをいうことはほとんどありません。
- ③ ハナコさんはとても優しくなり、まわりのお友達よりもとても優しくなりました。お友達をいじめたり、嫌なことをいうことは全然ありません。

注1: 下線部は標準課題においてのみ、()内は努力無し課題においてのみ用いる表現

注2: 〇〇には対象児の名前を入れた

的には、登場人物が望ましくない特性に対する改善願望だけでなく、改善努力を継続的に実施したことを示す物語内容に変更した。努力無し課題における物語は研究1で使用した内容とほぼ同じであり、登場人物は望ましくない特性を現状のままで良いと思っており、改善努力も実施していない。研究1で使用した特性のうち、2つの心理特性（意地悪、覚えるのが苦手）のみ使用し、努力無し課題、努力有り課題、それぞれ2つずつ作成した。物語提示後に、登場人物の努力の有無について質問した（(例)「ジロウ君は意地悪なのを直したいと思ってがんばっているかな？それとも、そのままでもいいやと思って全然がんばっていないかな？どっちだと思う」）。誤答の場合は説明を再度実施後に、正答の場合は直後に、特性変容を推論させる質問を実施した。物語・課題例はTable2-1に示した。そのほかは、研究1と同一であった。

2 結果と考察

物語中の登場人物の改善努力の有無についての質問に誤答したのは（登場人物について、努力有り課題においては「がんばっていない」と答え、努力無し課題においては「がんばった」と答えた場合）、5歳児クラスでは努力無し課題（意地悪）において1名のみ、4歳児クラスでは努力有り課題において5名（2名が意地悪、3名が覚えるのが苦手において）であった。誤答した対象者に対しては、再度、登場人物の努力の有無についての説明を行い、理解の徹底を図った上で特性変容を推論させる質問を実施した。研究1と同様の手続きにより特性改善得点を算出した。学年別、課題タイプ別の平均得点をTable2-2に示した。分散が0の条件があるため分散分析はしなかった。

意地悪、覚えるのが苦手の各特性について、努力有り課題と努力無し課題の特性改善得点が同じであった場合をE=N（EはEffort、NはNon-effortの略）、努力有り課題の方が努力無し課題よりも特性改善得点が高かった場合をE>N、努力有り課題の方が努力無し課題よりも特性改善得点が低かった場合をE<Nとして対象者を分類した。Table2-3はこの方針に沿って特性別に対象者を分類し、人数と割合を示したものである。各特性、年齢群ごとに人数の偏りがあるかどうかをカイ二乗検定により分析した。なお、下位検定はライアン法による多重比較を行った（有意水準をP=.0167に設定）。5歳児クラスはどちらの特性においても有意であり（いずれも $\chi^2(2) = 24.0, p < .01$ ）、E=Nの割合が他カテゴリより多いことが示された（いずれも $p = 0.0014$ ）。4歳児クラスにおいては、意地悪においては有意であり（ $\chi^2(2) = 18.50, p < .01$ ）、E=Nの割合が他カテゴリより多いことが示された（E>Nとの比較では $p = 0.0094$ 、E<Nとの比較では $p = 0.0024$ ）。覚えるのが下手においても有意であったが（ $\chi^2(2) = 6.501, p < .05$ ）、多重比較では有意差はみられなかった。

以上の結果から、4歳児クラス、5歳児クラスともに、登場人物の努力の有無によって対象者の反応が変化する場合が多いわけではないことが示された。努力有り、努力無しの両課題において全く同じ反応を示す対象者の割合が最も多かった。この結果を踏まえると、「努力すれば特性が改善する」という努力依存の楽天主義は幼児期にはみられないことが強く示唆される。

Table2-2 研究2:特性改善得点平均値と標準偏差

	4歳児クラス		5歳児クラス	
	努力有り	努力無し	努力有り	努力無し
順序1	2.42 (0.53)	2.33 (0.69)	2.92 (0.19)	2.92 (0.19)
順序2	2.75 (0.56)	2.50 (0.58)	3.00 (0.00)	3.00 (0.00)
集計	2.58 (0.57)	2.42 (0.64)	2.96 (0.14)	2.96 (0.14)

注1: 順序1は標準課題を先に実施した条件、順序2は努力無し課題を先に実施した条件

注2: 得点範囲: 1(望ましくない特性のまま)~3(非常に望ましい状態に変化)

注3: カッコ内は標準偏差

Table2-3 研究2:各反応パターンを示した対象者数と割合

	意地悪		覚えるのが下手	
	4歳児クラス	5歳児クラス	4歳児クラス	5歳児クラス
E>N	1(0.08)	0(0.0)	3(0.25)	0(0.0)
E<N	0(0.0)	0(0.0)	1(0.08)	0(0.0)
E=N	11(0.92)	12(100.0)	8(0.67)	12(100.0)
N	12	12	12	12

注1: ①E>Nとは、努力有り課題の方が努力無し課題よりも特性改善得点が高い、②E<Nとは、努力無し課題の方が努力有り課題よりも特性改善得点が高い、③E=Nとは努力有り課題と努力無し課題の特性改善得点が高い、反応パターンである。

注2: カッコ内は割合

総括

本研究は、次の2点を明らかにすることを目的とした。第1に、幼児は望ましくない特性の改善の原因として努力や練習を想定することはほとんどない—つまり努力依存の楽天主義の段階ではない—との仮説を検証することであった。第2に、努力依存の楽天主義への移行はいつごろ開始するかを特定することであった。

2つの目的を遂行するために、研究1では、望ましくない特性に対する改善願望を有する人物と、改善願望もなく努力もしない人物をそれぞれ物語として示し、各人物の特性変容についての幼児、小1～小3の推論を比較検討した。その結果、幼児は小2以上の年齢群と比較すると特性改善の合いを高く見積もる傾向が全体的に高いことが明らかになった。また幼児では人物タイプによる反応の相違が見られなかったのに対し、小1以上の全年齢群においては、改善願望がなく努力をしない人物と比較すると、改善願望を有する人物に対して特性改善の程度を有意に高く見積もることが示された。以上の結果は、幼児期は努力依存の楽天主義の段階にはないという仮説を支持するものであり、努力依存の楽天主義は小1に開始することを示すものであった。

研究2は、研究1から導かれた結論の妥当性を高めるためになされた。望ましくない特性に対する改善努力の有無という点での違いがより明確な2タイプの人物をそれぞれ物語として示し、各人物の特性変容について、4歳児と5歳児の推論を比較検討した。その結果、各年齢群ともに人物タイプによる反応の相違がないことが示され、幼児期は努力依存の楽天主義の段階にはないという仮説を支持するものであった。

以上のことから、一連の先行研究 (Lockhart, et al., 2002; Lockhart, et al., 2008; 中島・稲垣, 2007) と同様に、幼児は年長の子どもや大人よりも楽天的傾向が強いことが示された。さらに、幼児期の楽天主義は努力依存の楽天主義の特徴を持つものではないこと、努力依存の楽天主義への移行は小1に開始し、少なくとも小3にいたるまでは年齢と共に強まるものであることが強く示唆される。

それではなぜ小1に移行が開始されるのだろうか。現時点では、小学校入学頃に開始し中学年頃に明確化するといわれる努力と能力の概念分化 (伊藤, 1995)、自他の能力の社会的比較 (清水, 2009) といった子ども側の要因、小学校教育の開始に伴う教師や親の子どもに対するかかわり方の変化 (中島, 2012) (例えば、努力や練習を強調することが増えるなど) といった環境側の要因が候補として挙げられるが、今後、実証的に検討する必要がある。

最後に、幼児期の楽天主義は「年月の経過とともに望ましくない特性はとても望ましい特性へと (自然に) 変わるだろうという信念」を含む場合が多いと考えられるが、この点についてもより厳密な方法で検討する必要があると考える。

文献

- Heine, S. J. (2001). Self as cultural product: An examination of East Asian and North American selves. *Journal of Personality*, 69, 881-906.
- 伊藤忠弘.(1995). 自尊心の維持と高揚. 宮本美沙子・奈須正裕 (編著) . *達成動機の理論と展開*. 東京: 金子書房.
- 北山忍.(1998). *自己と感情—文化心理学による問いかけ—*. 東京: 共立出版
- Lockhart, K. L., Chang, B., & Story, T. (2002). Young children's beliefs about the stability of traits: Protective optimism? *Child Development*, 73, 1408-1430.
- Lockhart, K. L., Nakashima, N., Inagaki, K., & Keil, F. C. (2008). From Ugly duckling to swan?: Japanese and American beliefs about the stability and origins of traits. *Cognitive Development*, 23, 155-179.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 中島伸子.(2012). 自己肯定感の形成: 子どもの楽天主義研究から考える. *児童心理*, 66(11), 914 ~ 920.
- 中島伸子・稲垣佳世子. (2007). 子どもの楽天主義: 望ましくない特性の変容可能性についての信念の発達. *新潟大学教育人間科学部紀要: 人文・社会科学編*, 第9巻, 229-240.

- 清水由紀.(2009). 児童期②:友人とのかかわりと社会性の発達. 藤村宜之(編著) 発達心理学(pp.101-124). 京都: ミネルヴァ書房.
- 内田伸子.(2008). *幼児心理学への招待—子どもの世界づくり*. 東京:サイエンス社.

付記

本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(C)(2012年度～2014年度, 課題番号24530810, 研究代表者: 中島伸子)ならびに日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(B)(2015年度～2017年度, 課題番号15H03451, 研究代表者: 中島伸子)の補助を受けた。

本研究の実施に際してご協力くださった新潟市社会福祉協議会の職員の皆様, 内野および西内野ひまわりクラブ(放課後児童クラブ)の職員ならびに児童の皆様方, 新潟市の愛慈保育園, 関屋保育園の職員ならびに園児の皆様方には心よりお礼申し上げます。